Acanthus

（土浦一高・旧土浦中学とその周辺の物語）

第２００号　2026（令和８）年 ５ 月 19 日

茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰhttp://www.sin-syu.jp/

進修同窓会 HP にアクセス

叡山電鉄八瀬駅

平安遷都紀念樣

土浦中学校の修学旅行 13　中学 30 回生の関西旅行７

1930［昭和５］年６月１日から８日にかけて実施された土浦中学 30 回生の関西旅行。今号では７・８日目の行程を『進修第 32 号』「関西旅行記」と『中三十回卒業五十周年記念誌』所収の中 30 回松井喜一郎「旅行記余聞」とで辿っていきます。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。なお、引用文中の【　　】は筆者による注記です。

第七日（6月7日）比叡山から石山寺へ　五年宮本信三

「午前五時起床。薄寒い風が室内に流れ込む。誰も帰郷の準備で忙しい。荷物は自動車で大津へ送ることになつてゐるので壊れ易いものだけ持つて、七時十五分宿屋を発し、鴨川の清き流れに沿うて出町柳に向つた。此処からは叡山電車【叡山電気鉄道（現叡山電鉄叡山本線）】が八瀬【現八瀬比叡山口】に通じて居る。僅か十五分で八瀬の童子(注1)で有名な八瀬に着いた。空には仙女の様な白雲が飛び交うて全く初夏の趣だ。

加之【しかのみならず】渓流が流れて居た実に素敵な景色だ。蕨餅が名物だが例に依つて甘くない。附近は遊園地になつて居るが其の設備は僻村に稀な程完備して居る。轟々の音を道導【みちびき】にして登れば飛瀑巌を劈き【つんざき】、直下すること十幾尋【ひろ】。恰も一垂の素練【それん　白い練絹（練って軟らかにした絹布）】の様だ渓水に沿うて進めば、渓澗【けいかん　谷川。渓谷】の水、岩に激して奔雷【ほんらい　激しく鳴るかみなり】の轟くが如く、一折して直角を為す所、飛沫散て高きこと丈余、曲折し奔流し、石益々大に、水愈々激し、水は石を噛み、石は水を搏ち【うち】、水叫び石嘯き【うそぶき】、渓流の奇形容するに詞なく、唯々感歎に充ちて登れば、天をも摩す高塔あり。之、「平安遷都記念棠【正しくは「平安遷都紀念樣」】(注2)」なり。俯して眺むれば、峨々たる山岳相連りて洪涛【こうとう　大波】の漂ふが如く、谷の川音、雨とのみ聞えて松の風もなく、更に渓水に沿うて進めば、峻崖の下、白沫散ずるの瀑布となり、或は翠泛【すいはん　青々とした水の流れ】徐ろに【おもむろに】汀渚【ていしょ　みぎわ。なぎさ】を洗ふ深潭【しんたん　深い淵】となり。山を繞り【めぐり】てたゞこれ宛然たる一大パノラマなり。

戻りて西塔橋に至り、九時廿五分ケーブルカーにて叡山に登る。筑波山のそれと全く同じだ。山弥【いよいよ】深く、道益々嶮に、頂上に達すれば東南より東北にかけて琵琶湖が見えるが、晴靄【せいあい　晴天のもや】模糊として対岸は見えない。西南は煤煙の為、全く眺望はきかぬ。中食して、十一時古杉古松の鬱然たる中を下り、廿五分にして天台宗山門派の総本山なる延暦寺(注3)に着いた。

帝都の鬼門、王城鎮護の寺である。伝教大師（最澄）の開創で、今年は一千百五十年に相当する。朱塗の六伽藍で、所々は禿げて居るが、古木之を囲み、一種言ふべからざる荘厳の気に圧せられる。東して左し、だら〳〵坂を下れば根本中堂に至る。入りて見学する者、僅か十余人。当院は大師創始の寺観にして、本尊薬師仏を安置し、桓武帝の勅命により、延暦十三年九月に建てたのであつて盛んなる時は三千の坊あり。今なほ三百余ありと。

織田信長が元亀二年に之を焼いたが、現今の建築は徳川家光が寛永十一年より十九年までかゝつて完成したのである。裏頭【かとう】(注4)に長刀を振つた悪僧共、叡山といへば山法師、山法師といへば叡山とまで海内【かいだい　四海の内。国内。天下】に鳴響いたのも、あはれ一夕の夢、さもあればあれ、三塔十六谷の閑寂な寺坊に蛍雪の功を積んだ碩学高徳も、亦この山から輩出したのである。十数町にしてケーブルカーの発車場に至る。南には渺々として瑠璃を敷けるが如き鳰の海【におのうみ　琵琶湖の別称】を瞰【みおろし】、北は百尺の老松断崖に横はり、千仞の断崖深淵に臨み、山路の妙、渓流の奇、形容するに詞なし。零時四十分発の【ケーブル】カーに乗る。正に満員。峨峨たる絶壁、今や崩壊せんとして然も泰然山腹を迂曲する螺道【らどう　螺旋状の曲がり道】を走る。或は千仞の深淵に臨み、嶮角を匍匐し、猿猴【えんこう　猿類の総称】の藤葛に縋る【すがる】が如くして一時五分山麓に到着し、隊伍を整へて坂本に向ふ。砂利のある道を約三十分の行軍の後、【太湖汽船（2代目）（現琵琶湖汽船）】唐崎丸に乗る。鷗の様に真白な、爽快な気分を充分に味はへる舟だ。加之、天気は好く、波は至つて穏かで絶好の巡覧日和だ。船中は涌き返る様な歓喜の叫びで充満してゐる。修学旅行案内の小舟【「冊（冊）」の誤植か】を取り出して見れば『琵琶湖は陥没地帯に成れる湖にして、単に淡海と称し又は鳰の海ともいへ。形琵琶に似たるを以て琵琶湖と謂ふ。東西最広【最も広い所で】五里廿六町、南北最広十六里十三町、周囲五十九里卅二町、湖面海抜八十六米、最深処三百十七尺、水温は最低六度内外にして氷結せず云々。』とある。愈々出帆した。左舷から安土城が微かに見える。又遙か彼方には伝説に名高い近江富士が見える。近江富士は三上山と称し、山容は玲瓏たる名玉の如く、その柔和な南画的な線は、近江富士と呼ばれる所以である。

右舷からケーブルカーのトンネルの上に明智光秀の居城【坂本城】の跡が見える。又蕭々たる【唐崎の】夜雨で有名な【唐崎神社の】名木一つ松【唐崎の松】

が見える。近江八景の一も寄る年波に晒されて儚くも滅び、巨龍の様な枯骨は徐ろ哀惜の感を抱かせる。折から説明者が入つて来る。切口上で初【始】まつた。商売とは云ひながら中々巧なので、『うまい〳〵。』の連発だ。彼も益々メートルをあげて得意然に語つて居る。皆感心した様に傾聴して居る。昔俵藤太【藤原秀郷 ふじわらのひでさと】が近江富士を七巻半して而も瀬田の唐橋に頭を出した百足を退治したと云ふが、それでは其の百足の全長は十八里にも及ぶ。何ぼ藤太が頑張つても十八里もある百足は退治できまい。たつた一本の手拭でも頭にまけば八巻と云ふから、頂上を七巻半して手拭一本より短い百足だらう等の滑稽を云つて皆を笑はせる。沖に出るにつれてうねりは高くなるが、動揺は少しも感じられぬ。長の行軍の為か誰も沈黙してゐる。エンヂンの音のみが聞える。左舷に当り志賀宮趾が見える。大津市の北に延びた平野に在つて、天智帝の都したまひし処で、滋賀村は稍【やや】京城の中心に当ると云ふ。

さゞ波や志賀の都は荒れにしを
昔ながらの山桜かな

【平忠度 千載和歌集】.

を憶ひ起す。又右舷からは京都中学のボートレースの白熱化した様が見える。下手だ〳〵の連発だ。船員が何とか申し訳をして居る。

軈て【やがて】膳所城跡が見える。本多氏の城だ。続いて一帯の松林は所謂、【近江八景の一つ】粟津の晴嵐の景で、木曽義仲の戦死の地。義仲寺(注5)あり。今井兼平(注6)の墓もある。我等が船は瀬田の唐橋を通過して石山寺出張所に着いた。……。」

松井は「旅行記余聞」で、宮本の旅行記を

「……。締めくくりの第七、第八日は宮本信三君。さすが大人【うし 貴人の称同級生を敬って使っている】宮本の命【みこと】の作品である。比叡山延暦寺を語り、琵琶湖周遊を楽しみ、さらに帰途の車中から富士を仰いで感嘆するのであるが、内容の豊富さといい、記述の正確さといい間然する所がない。やがて医者になり、政治に志しては県会議員、筑波町長として実績を挙げるのであるが、その片鱗が窺われる。……。」と評しています。古刹や史蹟に関する知識も豊富で、「八瀬の童子」、「今井兼平」などは中学生のレベルではありません。

瀬田辺りで、京都の中学の校内ボートレース大会が開かれていたようです。毎年、霞ヶ浦で学年対抗・クラス対抗のボートレース大会(水上運動会)が行われ、オール捌きに磨きをかけていた土中生からすれば、「下手だ〳〵。」の連発になったのでしょうが、「船員が何とか申し訳をして居」ったところからすると、土中生の言は的を射たものだったのでしょう。現在、膳所から瀬田にかけての琵琶湖畔や瀬田川畔には、社会人・大学・高校の艇庫が点在し、「関西みらいローイングセンター(琵琶湖漕艇場)」では、「朝日レガッタ」など各種のレガッタが開催されています。当時も、旧制第三高等学校(現京都大学)ボート部をはじめとする各種の学校などのボートメンが、「琵琶湖就航の歌」(注7)さながらに、湖面を漕ぎ渡っていたと思われます。

(注1)**八瀬の童子**
八瀬童子(やせどうじ、やせのどうじ、はせどうじ)は、山城国愛宕郡小野郷八瀬庄(現京都市左京区八瀬)に住み、比叡山延暦寺の雑役や駕輿丁(がよちょう 輿を担ぐ役)を務めた村落共同体の人々を指す。寺役に従事する者は結髪せず、長い髪を垂らした、いわゆる大童(おおわらわ)であり、履物も草履を履いた子供のような姿であったため、童子と呼ばれた。中世以降、大礼・行幸、その他、朝廷に事あるときに出仕して駕輿丁を務めた。年貢課役を免除され、朝廷の慶事に労役を提供するのを例とした。

(注2)**平安遷都記念棠【正しくは「平安遷都紀念樣」】**
京都に都が移されて1100年目を迎えたことを記念して、1895[明治28]年に実施された「平安遷都千百年紀念祭」の成功を後世に伝えるため、1902[明治35]年に建立された塔。建立時は、遷都1100年に合わせて創建された平安神宮の境内北側にあったが、1929[昭和4]年、比叡山延暦寺の麓、八瀬の地に移転された。塔の高さは18m48cm。

(注3)**延暦寺**
「延暦寺」とは、単独の堂宇の名称ではなく、比叡山の山内にある1700ヘクタールの寺有地に点在する約100ほどの堂宇の総称である。山内を地域別に東塔(とうどう)、西塔(さいとう)、横川(よかわ)の3つに区分している。これらを総称して「三塔十六谷」と称し、「三塔」それぞれに、中心となる仏堂があり、これを「中堂」と呼んでいる。東塔の根本中堂は、延暦寺の総本堂にもなっており、本尊は薬師如来で、その前には1200年間灯り続けている「不滅の法灯」が安置されている。

(注4)**裹頭(かとう)**
僧侶が袈裟(けさ)で頭から顔を包み、目だけ出した装い。かしらづつみ。

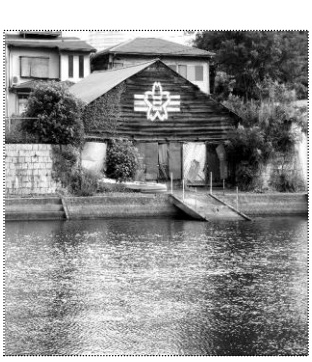
裹頭姿の僧

(注5)**義仲寺**
1184[元暦元]年、この地で戦死した木曾義仲の菩提を弔って、愛妾であった巴御前が草庵を結び、日々供養したことに始まると伝えられる。戦国時代に荒廃したが、1553[天文22]年頃、近江守護の六角義賢によって再興された。俳人松尾芭蕉はこの寺と湖南の人々を愛し、度々滞在し、句会も盛んに行った。大坂で亡くなった芭蕉だが、「骸(から)は木曽塚に送るべし。」との遺志により、1694[元禄7]年、義仲の墓の横に葬られた。芭蕉の門人である島崎又玄(ゆうげん)の句「木曽殿と背中合わせの寒さかな」は有名である。

(注6)**今井兼平**
木曾義仲の乳母の子。源義仲の家臣で、木曾四天王の一人。義仲に従って入京後、源範頼・義経の軍に敗れ、義仲の最期を知ると太刀を銜えて馬から飛び降り自害した。謡曲に「兼平」がある。

(注7)**琵琶湖就航の歌(作詞:小口太郎、作曲:吉田千秋)**
旧制第三高等学校に水上部(後のボート部)が設立されたのは1892[明治25]年。部員による琵琶湖周航(琵琶湖1周の漕艇)は、創部の翌年に始められ、漕手6人舵手1人から成るフィックス艇に乗り、艇庫のある三保が崎(大津市)から時計回りに琵琶湖を1周するもので、3泊ないしは4泊で行われた。

この周航は、1940[昭和15]年頃まで行われていた。土浦中学ボート部でも、1909[明治42]年から同じフィックス艇での霞ヶ浦遠漕が始まっている。



旧制三高ボート部艇庫

この歌は、三高ボート部が毎年恒例の琵琶湖周航をしていた1917[大正6]年)6月28日、部員の小口太郎が、「今日ボートを漕ぎながらこんな詩を作った。」と、当時学生の間ではやっていた「ひつじぐさ」(作曲:吉田千秋)のメロディーに乗せて披露した。

その後、この歌は三高の寮歌・学生歌として伝えられ、1933[昭和8]年には最初のレコーディングが行われた。戦後も多くの歌手に歌われ、中でも、1971[昭和46]年に加藤登紀子がカバーしたレコードは大ヒットした。

(高21回 松井泰寿)